

棚田学会通信

第30号 2010年2月19日
 発行/棚田学会
 〒184-8577 東京都小金井市本町6-5-3
 (ふるさときゃらばん内)
 TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



福岡県星野村広内・上原地区の棚田 (撮影：永田博義)

◆巻頭言	2
“わが町は日本一”の誇りとともに—福岡県星野村— ……福岡県星野村村長 高木 良之	
◆会員通信	3
10周年特別企画「歴史と未来」談話会に参加して ……千葉県市川市 佐藤 真弓	
棚田の学びへの第一歩 (10周年企画「出前授業」)	
……………立正大学准教授 堀田 恭子	
文化遺産を後世に残し伝えるために—熊野市紀和町・丸山千枚田保存会の今—	
……………(財)紀和町ふるさと公社理事長 下川 勝三	
◆日本の棚田百選紹介	6
奈良県明日香村の「 <small>いなぶち</small> 稲渚」 ……奈良県明日香村 高内百合子	
◆書籍紹介	8
安野光雅著「明日香村」 ……阪南大学教授 吉兼 秀夫	
◆事務局ニュース	8
現地研修会・見学会のお知らせ・2010年度棚田学会大会のお知らせ	
棚田学会誌11号の原稿募集・棚田学会賞基金・編集後記	
◆官庁ニュース	9
重要文化的景観の新選定について……………文化庁記念物課文化的景観部門技官 鈴木 地平	

巻頭言

“わが村は日本一”の誇りとともに

—福岡県星野村—

福岡県星野村村長 高木 良之

星野村は、全村にわたって石積みの棚田を有し、その景観は素晴らしく、特に広内・上原（うえばる）地区の天に続くような棚田は目を見張るものがあり、棚田百選に選ばれています。平成6年には、第3回美しい日本の村景観コンテストで農林水産大臣賞をいただき、日本一美しい村として認定されました。現在この棚田は、地元の住民によって守られ、都市との交流事業を行っています。

星野村は、日本の村の中で唯一「星」がついた村です。平成元年より竹下元首相が提唱した「ふるさと創生事業」からの1億円で、住民の総意を得た「星と文化の里づくり」事業に着手することとしました。当時九州一の天文台と宿泊施設「星の文化館」、しずく茶や茶道を継承する「茶の文化館」、「星野焼展示館」等、地場産材にこだわった木造建築を建設してまいりました。この地域づくりが功を奏し、県下でも最も元気のある村だと評価を受けるようになりました。

平成9年には、潤いと活力あるまちづくり部門で「自治大臣賞」、平成13年には豊かな村づくり部門で「内閣総理大臣賞」をいただきました。又、本村には広島原爆直後、当時兵士だった山本達雄氏が持ち帰られた原爆の火が、平和の火として、平和の広場の一角に64年間燃え続けています。

このような素晴らしい景観と自然、産業、歴史を誇りにしながら、星野村の未来発展のために、私達は努力してまいりました。この努力が報われて、昨年の10月には、山形県大蔵村にて、日本で最も美しい村連合へ加盟を認められ、全国33町村の仲間入りをさせて頂きました。

今、全国の棚田が、高齢化、後継者不足で荒れてきています。本村でも、地球温暖化による異常気象、イノシシ被害等、棚田を脅かすことが起きています。しかし、世界には、すばらしい景観や自然、文化を守る、わずか数百人、数千人の村が元気に残り、国が支援しています。しかしながら、我が国は、地方の文化や歴史に目を向けることなく、地域をないがしろにし、効率主義による政治が行われていることに対し、憤りを感じます。

星野川が矢部川へと注ぎ、源流の村・星野村が棚

田や森林によって、緑のダムとして、流域に恵みを与え、有明海の漁や海苔に大きな貢献をしていることは、皆が認めるところであります。思い起こしますと、第1回の棚田サミットを星野村でやりたいとのことで、ふるさときゃらばんの石塚さんより協力依頼がありましたが、その時は実現できず、第6回に浮羽町と星野村で協同開催を行った経緯があります。

素晴らしい景観と文化を伝承してきた星野村も、本年2月1日付をもって八女市と2町2村とで合併し、120年の自治体としての歴史に終止符をうつことになりました。大変残念なことはありますが、今後は、新八女市星野村として新しいスタートを切ることになります。今回の合併が、住民の誇りと自信を失うことのないよう、次の世代にきりりと光る星野村を託さねばならないと強く感じています。

これからも、全国の棚田の関係者の皆様と連携を取り、棚田を守っていききたいと思っています。

（平成22年1月18日記）



福岡県星野村棕谷の棚田（撮影：永田博義）



福岡県星野村広内・上原地区の棚田（撮影：永田博義）

会員通信

10周年特別企画「歴史と未来」

談話会に参加して

千葉県市川市 佐藤 真弓

平成21年12月12日の第19回談話会は、棚田学会10周年記念誌「2009 ニッポンの棚田」に寄せられた投稿の中から三名の方々に直接お話頂くとのことで、演題は、湯浅治久氏（市立市川歴史博物館学芸員）による「房総中世村落論と棚田研究—その可能性を求めて—」、松原誠司氏（芝浦工業大学柏中学高等学校教諭）による「車田と農業儀礼」、吉川國男氏（NPO 法人野外調査研究所理事長）による「棚田構築の歴史と活用—秩父寺坂の例—」でした。今回出席がかなわなかった方のために、私のつたない感想を交えつつご紹介いたします。

まずトップバッターの湯浅氏。記念誌では大山千枚田についてお書きになっていた湯浅氏ですが、今回はさらに発展した内容で、房総における中世の村落のなかで、棚田がどのような意味を持っていたのかという大きなテーマでのご講演となりました。

湯浅氏は河岸段丘に棚田が開かれた例として、上総国子安村谷田の近くの、下総国東庄上代郷と下総国結縁寺村を紹介されました。千葉県全体の地形地域区分図（形態や成因を考慮しつつそれぞれの土地の特徴により注目して地域的な分類を行ったもの）や地質図等の上でそれぞれの場所を説明されましたが、普段よく見る地形図とは違って、地形の大きな特徴がわかり、とても新鮮に感じました。また、「金沢称名寺文書」のなかで上総国久保郷のものとされていた史料が、湯浅氏のご研究により場所が特定されたとのこと。館山は安房国府が置かれ、早くからその周辺の開発が進み、谷田とテラス状の棚田のセットが作られたところとのこと。2007年に刊行された『千葉県の歴史 通史編 中世』のなかで、湯浅氏が詳しくお書きになっておられますので、是非ご覧下さい。

2番目に登場された松原誠司氏のご研究は、民俗学からのアプローチでした。私は「車田」というものを初めて知り、田の植え方にこのような方法があるのかと、とても驚きました。車田とは、円形の田に円形あるいは放射状に稲を植えた田のことで、岐阜県高山市松之木や、新潟県佐渡市北鶴島等に現存するそうです。鎌倉時代の複数の史料に「車田」の

名称が確認でき、松之木の車田については伊勢神宮との関係を示す江戸時代の史料も紹介されました。問題は、史料に残る「車田」がその植え方を表した言葉か、それとも単なる地名なのかが明確でないことだそうです。配布された資料の中に佐渡北鶴島の車田の古い写真があり、興味を引かれました。民俗学的アプローチは、史料などの裏付けがない場合が多く大変難しいものだと思います。現在では聞き取り調査も地名からの推測も非常に難しいと思われませんが、今後さらに車田に関する研究が進まれるものと期待しております。

最後に講演なさいました吉川國男氏は、秩父寺坂の棚田を紹介されました。配布資料の中に吉川氏が項目を立てられた「棚田調査票」というものがありました。棚田を見る観点という意味で、このようなフォーマットがあると整理しやすいと思います。レジュメで紹介された吉川照章氏の「寺坂棚田の概況」によると、寺坂は耕作放棄された場所も多いようで、残念です。ここは荒川に通じる川の水系にあり、昔から水運などで栄えていた場所とのこと。秩父には縄文時代の遺跡をはじめ秩父札所もあり、鎌倉武士を輩出した土地柄とのこと、今回のお話をうかがって秩父に対するイメージがだいぶ変わりました。また、寺坂棚田の用水は、川からの導水、滲み水、天水とのことで、この点については、最後に中島会長から沢水や湧水を利用するものは歴史的に古いものと考えられるが、用水路を引いているものは時代的にかなり新しいのでは、というお話も出ました。記念誌でのレポートを拝見しますと、この寺坂棚田は吉川氏がお書きになった新聞記事のおかげで圃場整備計画による消滅を免れ、その後保全活用として「寺坂棚田学校」が開校されたとのこと。

以上、大雑把なご紹介になってしまいましたが、皆様のご講演、大変勉強になりました。ご研究のさらなるご発展をお祈りいたします。



左から湯浅治久氏、松原誠司氏、吉川國男氏、海老澤衷氏

「棚田の学びへの第一歩」 (10周年企画「出前授業」)

立正大学准教授 堀田 恭子

大学教員は半年で約15回分、一人で授業をこなさなくてはならない。しかし立正大学の場合、石橋湛山記念基金「教育振興助成費」を申請して通ると、一つの授業につき1回だけ授業内講演会を行うことができる。そのため、ものぐさな私は毎年申請をして、自分の授業回数を一回減らし、外から講演者をお呼びして授業内講演会を行っている。学生にも好評な行事である。今回は「棚田出前授業」を学会理事でもある安井一臣さんをお願いをした。

授業日は12月8日(火)の3時間目(12:50—14:20)で、私の担当する「社会開発論」の授業内で行われた。授業タイトルは「棚田から農山村地域活性化を考える」であった。約100名の受講生が通常の授業よりも真剣に話に聞き入っていた。受講生は文学部社会学科2年生を中心に、3年生、4年生、そして史学科、哲学科、文学科の2年生以上の学生たちだ。彼ら／彼女らにはほぼ共通していることは「棚田ってなに？」ということだ。つまり、棚田を「見たことがない／聞いたことがない」という学生たちである。

「社会開発論」という授業は大きく三つのことを学ぶ。一つ目に開発援助の話。映像を使いながら先進国の善意が必ずしも途上国にとって善行ではないということ述べる。それでは、どうやって国のあるいは地域の持続的な発展を望めばよいのか。そのキーワードとなるのが二つ目の内発的発展論の話である。国内外の開発において、外からの開発ではなく今そこにある資源を持続的に有効に活用していく内発的発展論は豊かな可能性をもつ。そこで、具体的にまなざしを国内にうつして、農山村分析によるやくだとりつく。そこにあるのは「棚田の保全」という三つ目のテーマだ。

今回、二つ目のテーマが終わったところで、棚田出前授業となるよう設定した。安井さんには「棚田とは何か、棚田への誘いにむけて」お話していただくようお願いをした。学生たちが話を聞いた後、「棚田って大切じゃん」と思うか「棚田って、全然、自分に関係ないし」と思うか、非常に分岐点となる授業でもあった。もちろん、上記のかくれた私の願いは安井さんにはお伝えしていない。そこまでお願いしたら「自分でやりなさい」とお断りされる可能性大だったからだ。

その結果、他力本願の私の願いは見事に達成された。安井さんの誠実なそして見事な話術、非常に美しい写真の数々、さらに「食」を媒介にした身近な

かつ緻密なデータでの説得力によって、学生たちは、「棚田」を知ってしまったのである。授業終了後、学生たちからの質問があまりなくヒヤヒヤしたが、実は彼ら／彼女らは「はずかしがりや」で、感想文には約2割の学生が、安井さんに対して棚田に関する質問を書いた。後日、書かれた質問に対して安井さんは個別回答文書を作成し、私のところまで送ってくださった。それらを個別の封筒にいれ、最後の授業で該当学生に配布した。その後、半年間を終えての授業全体の感想を書いてもらって終わりとしたが、その感想もかなりの学生が私の授業の感想よりも「棚田の講演会」がよかったと書いていた。

「棚田の学び第一歩」は「棚田出前授業」で達成された。2008年の長崎での棚田サミット第二分科会で私があげたテーマの一つ「拡げること」を他力本願ながら試みることができたのである。次のテーマは「続けること」である。

次年度の「社会調査実習」という資格科目(社会調査士)の授業で、私は「棚田の保全」をテーマに学生たちと棚田の社会学的調査を始める。社会調査実習の開講クラスは私が担当する以外に全部で5クラスある。3年生が対象だが数あるクラスのなかから、「棚田の保全」をテーマにした社会調査実習に、どのくらいの学生が希望するのか、はたして希望学生はいるのか、これはふたをあけてみないとわからない。希望学生が多ければ、それはきっと「出前授業」のおかげで、希望学生が少なければ、それはきっと自分の授業のせいなのだろうと、今から原因分析をしている。でもやっぱり希望する学生のみで構成したいなあとひそかに願い続けている毎日でもある。結果はいかに？



講義中の安井一臣氏〔棚田学会理事〕

安井一臣氏による棚田出前授業は、平成21年に葛飾区郷土と天文の博物館、東京農工大学農学部、早稲田大学文学部、立正大学文学部、今年度は長崎県対馬市・対馬ヤマネコ田んぼの学校、長崎県雲仙市・小田山山彦の会で、計6回行いました。

文化遺産を後世に残し伝えるために

—熊野市紀和町・丸山千枚田保存会の今—

財団法人紀和町ふるさと公社理事長 下川 勝三

丸山千枚田保存会が発足して16年が過ぎようとしています。近年、保全作業に従事できるメンバーが減少したため、早急に組織体制を強化する必要がありました。そこで、平成20年度に地元丸山地区だけで構成されていた組織体制を見直し、紀和町内から新たに会員を募ることにしました。結果、20名の方が新規に会員として協力いただけることになり、平成21年度から新体制での取り組みが始まりました。このことにより、保全作業は順調に進み、作付面積も拡大するなど早速成果が現れています。新たなメンバーが加わったことが契機となり、千枚田の知識を深め、新たな取組を協議する「勉強会」を毎月開催しています。コミュニケーションを大切にすることで、保存会に活力が生まれたことは大変大きなことだと感じています。今回の視察研修は、勉強会から出てきた案で、実に16年ぶりの視察研修となりました。高齢者の多いメンバーからこのような提案があったことに大変驚くとともに、とても嬉しく感じました。

視察メンバーは、保存会員7名、ふるさと公社から私を含む2名、市職員1名の10名でした。参加した保存会員は男性3名(76歳、72歳、69歳)、女性4名(74歳、72歳、72歳、66歳)で、日頃から保全作業の中心を担っている方たちです。

今回視察したのは、岐阜県の「坂折棚田」と愛知県の「四谷千枚田」です。

一日目は坂折棚田へ向かいました。あいにくの雨でゆっくりと棚田を見学することができませんでしたが、美しい棚田景観に感動いたしました。棚田にある茶屋で、NPO法人坂折棚田保存会の鈴木直副会長と恵那市役所農業振興課の志津氏から坂折棚田



坂折棚田

の取組について説明をいただき、その後互いの取組について情報交換を行いました。坂折棚田は美しい石積みの景観がとても印象的でした。保存会では「石積み塾」という本格的な体験事業を行っており、このことも常に石積みを良い状態に保っている一つの要因とのことで、坂折棚田の特徴を生かした素晴らしい取組だと思いました。また、棚田のフォトコンテストを毎年開催し、入選作品を用いたカレンダーを作成販売するなど、棚田の魅力発信と保全経費の確保を行っています。私たちの棚田でも保全経費の確保として千枚田米の販売やオーナー制度の実施を行っています。自立には至っておらず市の援助をいただいているのが現状です。今回の情報交換で得た取組を参考に自立に向けた取り組みに知恵を絞っていきたいと考えています。



一日目：坂折棚田の情報交換会

視察二日目には、四谷千枚田を訪れ、鞍掛千枚田保存会から小山泰弘会長ほか5名の会員さんと、新城市役所鳳来総合支所から平賀副総合支所長をはじめ、3名の職員の方と情報交換を行いました。



四谷千枚田

当日は天候にも恵まれ、棚田を歩きながら小山舜二副会長の説明をお聞きしました。比較的若い方々でメンバーが構成されており、通常の農作業のほか、専門学校や養護学校のほか企業などを受け入れ

て田植えや稲刈り体験を行うなど、積極的に交流事業が図られています。また、「田吾作」や「連谷お助け隊」といった関係団体とも連携しながら、四谷の千枚田を核に地域の活性化が図られている様子がよく分かりました。さらに、歴史的背景として、四谷の千枚田には明治37年に起こった山津波により尊い命と棚田を失うという悲しい出来事があったそうです。しかし、当時の人たちは、それにめげることなく棚田の復興に立ち上がり、見事に石積みの棚田を復活させました。このような先人たちの想いを現在の保存会の皆さんが受け継いでいることをお話の中から強く感じ取ることができました。地域を大切に想う意思の強さが皆さんから溢れていました。

今回2箇所の素晴らしい取組を視察させていただいた中で、先人が築き上げた貴重な文化遺産を後世に残し伝えて行くという同じ想いを抱き、保全管理作業以外の交流事業等にも熱心に取り組む姿勢に大変刺激を受け、私たちも頑張っていかなければならないと改めて決意した次第であります。これからは、今回視察した2箇所の取組も参考に交流事業の充実と観光客に対する癒しの空間作りなど、地域を上げて取り組んでいく所存です。視察対応を引き受けていただいた両保存会の皆様と市役所の皆様には、貴重な時間を私たちのために割いていただき、温かい対応をしていただいたことに心から感謝しております。これを機会にこれからも交流を続け、お互いの取組について情報交換することで切磋琢磨しながら、共に頑張っていければと考えております。



二日目：四谷千枚田で記念写真

日本の棚田百選紹介

奈良県明日香村の「^{いなぶち}稲渚」

奈良県明日香村 高内 百合子

今年度の収穫祭は、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受けた記念植樹からスタートしました。

しだれ桜の若木が植樹されたのですが、今年の春には花が見られるとのこと。しだれ桜が植樹された場所は朝風峠。今はベンチもあって、稲渚の棚田が見下ろせる見晴らしの良い休憩場所になっています。朝風峠という名が彫られた石碑も立っていて、タクシーで「朝風峠まで」と言ったら間違いなくこの場所に案内してもらえます。



朝風峠の石碑

ずっと私もこの峠が朝風峠だと思い、地元のお父さんたち（棚田のインストラクターさん達を、私達はお父さんと呼んできました）との会話の中でも使ってきていました。それが、去年、豊田さん（第2期実行委員長）と立ち話をしている時に

「あそこ、みんな朝風峠と呼んでいるけど本当は違うねんで」

「えー、みんないつも朝風峠というてますよ」

「本当は上平田峠やったんや。本当の朝風峠はもうちょっと東にあって今は藪に埋もれてしまっていてわからんようになっているけどな」

「でもなんで、そんな地名が変わるようなことになったんですか」

「第1回目の彼岸花祭りの案内板を設置する時に、高内（その頃役場の郷づくり担当。棚田ルネッサンスを手がける。平成20年死去）が、朝風峠って書いたんや。それからは、村の者もみんな朝風峠と呼ぶようになったんや。」

と教えていただきました。「朝風」という言葉の響き

がきっと高内は気に入ったんだろうなと想像しながらも、地名まで変えてしまっているのかなど。でも今では豊田さんも、稲淵を訪れる人に棚田のエピソードの一つとして話されているそうです。

棚田ルネッサンス2年目から「おてんとうさま新聞」というミニ・コミ紙を発行してきました。途中休刊もしましたが、2004年6月発行のおてんとうさま新聞に「棚田のちょっと昔話」というコーナーがあります。その記事を紹介します。

棚田ルネッサンスは今から8年前 1996年に始まりました。280件の応募者の中から33家族が選ばれ参加しました。オサキの田んぼをウサギさんチーム、イワラタニの田んぼをリスさんチームと呼んでいました。遠くは、長野県から参加されている人もいました。(自分の名前が明日香だからとか・・・)この頃は、まだ棚田ルネッサンスのような活動が珍しく、行事があるたびに、テレビや新聞の取材がありました。棚田の様子が紹介されるたびに、自分のふるさとが紹介されているような気持ちになってうれしく見ていました。また、棚田ハウスでキャンプをする人達もいて、起き抜けに取材を受けたり「ここに住んでいるのですか」というような質問をハウスの前を通る観光客の人にされたりという笑い話もありました。

* 稲淵インストラクターの不良化問題*

稲淵のお父さん達が夜になると一人二人と棚田へ。いったい何が起きているんだと、大きな騒ぎにはなりませんでしたが・・・。

三年目ぐらいまではよく、月見だ・飲み会だ・話し合いだといったは、棚田ハウスでいるんな人がお泊りをしていたのです。真っ暗な田んぼの真ん中に棚田ハウスの明かりだけが輝いているというわけです。その明かりを見てインストのお父さん達も一升瓶や、おかずの差し入れを持って遊びに来てくださったのです。懐メロ大会では、保岡さんのギター伴奏で何曲も歌が続き、お父さん達の歌声をたくさん聞かせてもらいました。憩いの館とは違い、田んぼや、草原のにおいや、水音、虫の音が本当に身近に感じられて楽しいものです。まだ泊まったことのない人は一度経験してみてください。

幸せの味がするお米が収穫されるまでの様子が歌になっています。

農業がやりたい

作詞・作曲リョウ タカウチ

農業がやりたい	明日香でやりたい
お米を作りたい	小さなMyたんぼ
野菜も作りたい	命を育てたい
あぜ豆作って	ビールが飲みたい
夢はふくらむ	明日は田植え

だんだんと育つ	わが子のように
無事に育つことを	神に祈りながら
親父になる	娘になる
遊びに行っている	おじちゃんの家

「先生 なあーんもせんで おっきなるもんありまっか」
 「あほ なあーんも世話やかんでおっきなるもんなんかあるかー せやのー草ぐらいやのー」

夢はふくらむ	明日は稲刈り
--------	--------

天日で乾かす	お日様が乾かす
作ったお米はどんな味がする	
子どもに話したい	心の声で
命の豊かさ	みんなに知らせたい
夢はふくらむ	明日は脱穀

命の歌が 明日香に流れる
 ゆっくりと流れる
 永遠に流れる



稲淵の棚田

書籍紹介

安野 光雅著

「明日香村」

NHK 出版 2,190 円+税

阪南大学教授 吉兼 秀夫
(明日香村棚田オーナー会所属)

「明日香は、どこに立ってどの方向を向いても、絵になる風景が多い」と、作者安野光雅さんが最初のスケッチ『高家（タイエ）から甘檜丘（アマカシノオカ）』の冒頭で語る。9枚の明日香村外からのまなざしを含めて30枚のスケッチが温かく美しい。毎日この風土の中に暮らしていることをあらためて自慢に思う。

最後に地図が添えられており、スケッチをした場所とその方角が記されている。さっそくいくつかの場所に行ってみた。いつも見慣れた場所、好きなフォトスポットも多く含まれている。上居（ジョウゴ）や阪田、稲渕（イナブチ）周辺からのまなざしは私にはおなじみの風景だ。しかし、切り取られた風景ではない。温かい安野さんの心がこめられたやさしい風景だ。

画集は、左にスケッチ、右ページに安野さんの言葉が載っている。スケッチの解説だけでなく、スケッチした時のエピソード、その風景への思い、さらに明日香への思いが語られる。明日香を元気にしたいと住み着いた私には目からうろこが落ち、「そうそう」と溜飲が下がるお話が聞けてうれしかった。

細川谷を眺める『都橋から上居・細川』では、細川から多武峯へ抜ける道路計画を批判的に語られ、『町おこし』ではなく『町のこし』のほうが明日香の希少価値を高めるものだと思うのである。」と語られている。全くその通りだ。先日話題の道路開通のニュースを聞いて「多武峯（トウノミネ）に行きやすくなったな」と思ってしまったことが恥ずかしくなった。

『鬼の雪隠（セッチン）付近』では「古墳の墳丘とも、天然のものともつかない丘が点在し、遠くには大和盆地を取り囲む山々、そのふもとに切り拓かれた棚田が広がる。まさしく日本の原風景である」とある。鬼の雪隠や俎板、天武（テンム）・持統（ジトウ）天皇陵などを囲むように存在する景色を、それこそが明日香の風景であり、美しさであり、飛鳥人が護り、創ってきた風土であることを悟らせてくれる。私は、貴重、珍しいといった「図」ではなく、周辺の風景や文化となる「地」に関心を持つ観光の存在を指摘し、

「地」の整備を提案する「観光における図と地論」を主張しているが、スケッチされた場所に立ちその思いをより強くすることができた。

オーナー制で参加している田んぼに向かう時、きれいだなと思いつつ通り過ぎる風景がある。その風景を安野さんは描いてくれる。『稲渕峠から貝吹山』のスケッチである。飛鳥は足を止めなくてはいけない。その場に立ってつくづくそう思った。

それぞれのスケッチに感動しながら、飛鳥に暮らす飛鳥人として、その現場に立ちながら飛鳥にほれなおすことのできる画集であった。ありがとうございました。



安野 光雅著「明日香村」の表紙

事務局ニュース

■第20回現地見学会・研究会のお知らせ

日 時：平成22年5月15日（土）、16日（日）
主 催：棚田学会
共 催：地域地理科学学会
集 合：5月15日（土）PM 1時45分岡山大学
解 散：5月16日（日）PM 4時頃 JR 岡山駅
宿 泊：ホテルサンルート岡山
参加費：15,000円（宿泊、懇親会、バス移動代）
定 員：20名
〆 切：5月7日（金）（定員になり次第〆切）
内 容：

◆研究会 日時 5月15日（土）PM2時～
会場 岡山大学

◆懇親会 PM 6時～

◆見学会 日時 5月16日（土）AM8時30分～
場所 岡山県美咲町の大坪和西棚田
久米南町の北庄

詳細は同封のご案内のチラシをご参照ください。



大井和西（おおはがにし）棚田



北庄の棚田

■ 2010 年度棚田学会大会のお知らせ

大会及びシンポジウムの以下の通り行います。
詳細については後日ご連絡いたします。

日 時：2010 年 8 月 1 日（土）

会 場：三越劇場（東京日本橋三越本店 6 階）

■ 棚田学会誌 11 号の原稿募集

棚田学会誌 11 号の原稿を募集しています。

投稿は、論文、事例研究、報告とし、原稿枚数は概ね次のとおりとします。

- ①論 文 40(字)×20(行)×20(枚)以内(図表を含む)
 - ②事例研究 40(字)×20(行)×10(枚)以内(図表を含む)
 - ③報 告 40(字)×20(行)×10(枚)以内(図表を含む)
- 〆切は 3 月 31 日（論文は 2 月 28 日）です。

■ 棚田学会賞基金

棚田学会賞基金を受け付けております。
宜しく御願い申し上げます。

- 1. 募 金 額 1 口 5,000 円（1 口以上）
- 2. 募金方法 郵便振替用紙に「棚田学会賞基金」とご記入の上ご送金下さい。
- 3. 口座番号 00150-2-125247
棚田学会

■ 通信第 29 号の訂正

前号でご紹介した「日本の名景棚田」の書評で誤りがありました。ここに訂正しお詫び申し上げます。

誤→ A5 判 224 頁 ISBN 978-4-0546-5-C0061

正→ B5 判変 総 120 頁 ISBN978-4-8381-0408-6

■ 日本学術会議への加盟

棚田学会は設立 10 年を迎えました。本年度は棚田学会の節目の年となります。

日本学術会議への加盟申請を 2009 年 10 月行い、2010 年 1 月 28 日に正式に日本学術会議の協力学術研究団体として認定されました。

これにより、研究者にとっては大きなメリットになり、他学会等との連携もとりやすくなります。

■ 編集後記

地球規模での温暖化・環境・食料・エネルギー・経済の複合危機という厳しい現実を前にして、日本の社会経済システムを「健全化」の方向へ転換する、戦後初の（かつ最後となるかも）チャンスが訪れつつあります。

こうしたなか「農村地域再生」は、あらゆる観点から見て国レベルで取り組むべき最重要のテーマです。食料・エネルギーの地域自給戦略は、温暖化・環境対策の決め手の一つでもあり、棚田地域を含む農村に追い風が吹きつつあるといえましょう。

具体的には、これまでの自由貿易政策を見直し、農業と他産業間の「時給」差を補償し、再生可能エネルギーの高価買い取りを義務付け、農山村空間管理の労働を自然・国土保全の公益労働として所得補償すること等が必要です。その上で、若い夫婦が農村に住むには、安心して出産・育児ができる条件整備とその子弟の高等教育就学支援策が必須です。こうした一連の政策・制度対応が求められています。

そして地域・NPO・企業・行政・政界の各分野に、有能かつ志の高い「棚田保全人材」を輩出する教育事業の重要性を、わが事として噛み締めているこの頃です。
(千賀裕太郎)

官庁ニュース

重要文化的景観の新選定について

文化庁記念物課文化的景観部門
技官 鈴木 地平

文化審議会は、先に文部科学大臣より諮問のあった 4 件の重要文化的景観の選定及び 2 件の重要文化的景観の追加選定等について審議した結果、平成 21 年 12 月 11 日にその答申を行った。

今回の選定答申の中でも特筆されるものとして、次の 2 点が挙げられる。1 点目は、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」（石川県金沢市）について、都市の文化的景観に係る選定答申が行われたことである。我が国における都市の一つの典型である、近

世城下町に起源を持ち、近代・現代と展開してきた都市発展の在り方が、文化的景観として価値が高いものとして評価された。これは、平成17年度から平成19年度にかけて実施された、「採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」の一つの成果と言えよう。

2点目は、「姨捨(おばすて)の棚田」(長野県千曲市)の選定答申である。これは、平成11年5月10日に名勝指定された「姨捨(田毎[たごと]の月)」について、名勝指定地も含めて、大池から更級川(さらしながわ)にかかる水系一体について調査が行われ、評価されたものである。名勝の観点から「芸術上・観賞上の価値」のみならず、文化的景観の観点から「生活又は生業及び風土」の価値が認められたことは、地域で営まれてきた生活・生業を振り返り、今後の当該地域の在り方を考える上で大きな転機となると考えられる。

新たに重要文化的景観選定に係る答申が行われたもののうち、棚田に関する3件は次のとおり。

【姨捨(おばすて)の棚田】(長野県千曲市)

姨捨の棚田は、水源となる大池から更級川へと繋がる水系を軸として、用水や田越(たごし)の給水手法、「ガニセ」と呼ぶ暗渠による排水方法が網の目のように張り巡らされ、近世から近現代に至るまで継続的に営まれてきた農業の土地利用の在り方を示す独特の文化的景観である。

【榎原(かしはら)の棚田】(徳島県勝浦郡上勝町)

四国の勝浦川上流部の急傾斜面上に展開する棚田と居住地から成り、この地域の典型的・代表的な土地利用形態を示す良好な文化的景観。文化10年(1813)の分間絵図に描かれた水田・家屋・道などの比較により、200年以上も土地利用形態が変化していないことがわかる稀有な事例である。

【平戸島の文化的景観】(長崎県平戸市)

かくれキリシタンの伝統を引き継ぎつつ、島嶼地域の制約された地形条件の下で継続的に行われた開墾及び生産活動によって形成された棚田群や牧野、人々の居住地によって構成される独特の文化的景観である。

この他、重要文化的景観「小鹿田(おんだ)焼の里」(大分県日田市)の集落及び棚田の周囲に展開する森林区域について、また重要文化的景観「通潤用水と白糸台地の棚田」(熊本県上益城郡山都町)の用水受益地である棚田について、それぞれ追加選定の答申が行われた。新選定・追加選定ともに、単に棚田のみではなく、集落や森林区域も含めた、水系や生活圏を同じくする一定の区域が総体として評価さ

れたものである。その保存・活用を図ることによって、棚田と一体となって展開される、地域の生活・生業・風土によって形成された景観地を保護しようとするものである。



姨捨の棚田 尾根筋に展開する耕作地



榎原の棚田 田植え前の水田



平戸島の文化的景観 海岸沿いに展開する棚田

詳しくは…文化庁のホームページをご覧ください。
http://www.bunka.go.jp/oshirase_other/2009/pdf/hodo_bunkateki_keikan_091211.pdf